

表紙から

DPI世界会議札幌大会を支えるボランティア

今月の表紙は、学校法人北工学園札幌福祉専門学校（東区北五東八 藤枝正道校長 三百二十人）で福祉に関する勉強をしている、工藤靖寛さん(21)、佐藤綾子さん(20)、高井真司さん(25)、横関真由美さん(20)、土岐瑠璃さん(19)です。



福祉について話してくれた皆さん

同校には福祉施設などでボランティア活動に参加している学生が多く、中でもひととき積極的に関わっているのがこの五人です。「自分の力で暮らしたいと思っている高齢者や障害者の力になりたい」と話す皆さんは、老人ホームや知的障害者の施設などで、入所者と一緒にレクリエーションに参加したり、行事の手伝いをしたりして、日ごろからボランティア活動に励んでいます。

十月十五日(火)から十八日(金)まで、北海道立総合体育センター「きたえーる」(豊平区豊平五の二)で第六回DPI(障害者インターナショナル)世界会議札幌大会が行われます。同大会には、百カ国以上から二千人を超える障害者の皆さんや福祉に携わる方々が集まります。

同校からも、七十二人の学生がボランティアとして活動する予定です。会場では障害者の誘導をしたり、介助をしたりして、運営を支えます。

五人は「DPI世界会議札幌大会では世界各国から集まるさまざまな人と接することができ、今までとは違う視点から、誰もが自由に活動できる社会について考えていけるようになりたい」と抱負を話してくれました。

◆ ◆ ◆
同大会開催中は、札幌を訪れた障害者の皆さんと街で出会う機会も増えることと思います。この大会をきっかけに、私たちができることは何か、また、障害者の皆さんが何を求めているのかということとを、あらためて考えてみたいですね。

ひがすとりー

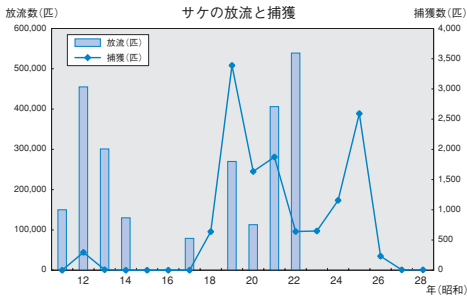
第19回

豊平川はサケの季節

サケの捕獲場を設ける

豊平川はもともとサケがすむ川です。昭和の戦前期から二十年代にかけて、豊平川に戻るサケを増やすために、サケの捕獲と稚魚の放流が試みられていました。

一九三〇(昭和五)年ころ、豊平川に架かる鉄橋の下流約百八十メートルの場所に北海道千歳鮭鱒孵化場が簡易捕獲採卵場を設けました。翌年、さらに下流へ約二キロ離れた場所に捕獲場を移します。しかし、しばしば増水に見舞われたため、思うような成果を挙げる事ができませんでした。その後捕獲は一時中断しましたが、一九三六(昭和十一)年に豊平川雁来捕獲場を設けて再開。しかし、その年サケは一匹も捕獲できず、代わりに千歳川で採



わりの千歳川で採

卵してふ化させた稚魚を十五万匹放流しました。

村の人たちが協力を設立する

一九四八(昭和二十三)年、雁来地区の人たちが、札幌村鮭鱒孵化事業協力を設立します。協力はサケ捕獲の認可を北海道庁から受けるとともに、卵をふ化場に渡すことを義務付けられました。

ところが、家庭や工場からの排水によって豊平川の水質が悪化。そのため、稚魚の放流は協力が設立された年から中止されます。捕獲数も一九五〇(昭和二十五)年を境に減少し、一九五三(昭和二十八)年は前年と同数の六匹でした。そこで、以後の捕獲を中止し、協力会も役目を終えたのです。

その後下水道の普及によって水質が向上したため、一九七九(昭和五十四)年に市民グループが稚魚の放流を再開。二年後の秋に親魚に成長したサケが川に戻ってきました。一九八五(昭和六十)年からは札幌市豊平川さけ科学館が稚魚の放流を行っています。今豊平川はたくましく成長したサケが戻ってくる季節を迎えています。